Notes about Interviews on the Use and Managament of Satoyama from the mid-1920s to the mid-1970s in Kanakura, Wajima City, Ishikawa Prefecture

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/35901

日本海域研究，第44号，99-115ページ，2013
JAPAN SEA RESEARCH, vol.44, p.99-115, 2013

聞き書き資料：輪島市町野町金蔵における昭和初期～昭和40年代（1920年代後半～1970年代前半）の棚田と里山の利用・管理

堀内美緒[1,2*]・中村浩二[1]

2012年9月24日受付，Received 24 September 2012
2012年11月22日受理，Accepted 22 November 2012

Notes about Interviews on the Use and Management of *Satoyama* from the mid-1920s to the mid-1970s in Kanakura, Wajima City, Ishikawa Prefecture

Mio HORIUCHI[1,2*] and Koji NAKAMURA[1]

Abstract

This article is based on interviews with elderly former residents of Kanakura, a farming hamlet in the mountainous area of Wajima City, Ishikawa Prefecture, Japan. Changes in the nation`s economic structure, and in people`s lifestyles due to the high economic growth in Japan, led to major changes in both agricultural production and in the lifestyles of Kanakura residents before and after the mid-1970s. We interviewed 12 residents (4 men, 8 women) born between 1922 and 1939 about the use of *satoyama* resources and rice terraces before the mid-1970s. As a result, we learned that the use of satoyama resources and the lifestyles in rural areas before the mid-1970s were being supported through numerous overlapping communities within the local area. It was also learned that the skill and wisdom in using *satoyama* resources and the rice terraces were shared within the local society, having been passed on through the various communities by kin, regional bonds, and craftsmen.

Key Words: *satoyama*, rice terraces, interview, the mid-1960s to the mid-1970s, Noto Peninsula
キーワード：里山，棚田，聞き取り，昭和40年代，能登半島

Ⅰ．はじめに

輪島市町野町金蔵は，白雉年間（650～654年）開基の歴史をもつ真言宗の金蔵寺を中心に，寺荘園から発展してきたといわれる山間にひらけた農村集落である。伝承の多さ，5つもの寺院をもつ村としての宗教面からの特徴，ため池と棚田の歴史などが着目され，これまでたびたび民俗学・人類学など人文社会学系の調査が入り，集落組織や行事，生業の変化についての調査が蓄積されてきた。1989年の民俗学者の香月氏による町野川流域調査（香月，2001），同年の金沢大学文学部文化人類学研究室による調査実習（金沢大学文学部文化人類学研究室，1989），1993年の龍谷大学社会学部社会学科の教員と学生による社会学調査実習（龍谷大学社会学部社会学科，1994）などである。他にも，金蔵住民自らが集落や家に伝

[1]金沢大学環日本海域環境研究センター生物多様性研究部門　〒920-1192 石川県金沢市角間町（Division of Biodiversity, Institute of Nature and Environmental Technology, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, 920-1192, Japan）
[2]金沢大学地域連携推進センター　〒920-1192 石川県金沢市角間町（Center for Regional Collaboration, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, 920-1192 Japan）
*連絡著者（Author for correspondence）

わる歴史や伝承を記録したものとして，「金蔵の昔がたり」（輪島市立金蔵小学校, 1994），「棚田のむら今昔―寺荘園村の歴史と現況―」（井池, 2010），「百年記念誌」（金蔵小学校百周年記念事業実行委員会, 1974），「町野小学校百年誌」（町野小学校創立百周年記念実行委員会，1976）などがある。近年は生態学や植物学による里山環境の調査対象地となり，2006年～2008年には，能登半島・里山里海自然学校による，ため池や棚田など里山の生物多様性調査が行われた。

近年，金蔵は朝日新聞社・森林文化協会による「にほんの里100選」や石川県による「先駆的里山保全地区」，環境省と国際連合高等研究所による「SATOYAMAイニシアティブ」の事例（注1）として取り上げられ，能登の代表的な里山のひとつとみなされている。しかし，従来の調査内容は，金蔵の歴史や伝承，むらの社会組織や農業に偏っており，里山の主構成要素であり，広い面積を占める山林の利用の変遷についてはほとんど調査されていない。また，戦後，実際に田畑を守ってきたのは集落の女性たち（注2）であり，その経験の記録は重要であるが，そのような調査も欠けている。

そこで，本稿では，金蔵の里山利用の変遷を既存資料から整理するとともに，これまで調査が少なかった山林利用と女性の経験が含まれるように聞き取り調査し，金蔵における棚田と里山の利用・管理をまとめ，能登半島の里山里海研究の基礎資料として供することを目的とした。

Ⅱ．金蔵の概要

1）調査地

輪島市町野町金蔵は，日本海に注ぐ町野川の中腹に位置する山間地の集落である。標高約100メートルの丘陵上に家々が点在し，緩傾斜面に棚田が開かれている。2011年の世帯数は64，人口は156人である。全国的な傾向と同様に，金蔵も高齢・過疎化の進行により，1960年の国勢調査に比べて人口は75%，世帯数は37%減少しており，2011年の高齢化率は52.7%となっている。2005年農林業センサスによると，最近の田面積は35ha，畑面積は9ha，耕作放棄率は6.9%であり，農業就業人口は57人で，そのうち生産年齢人口率は15.8%となっている。金蔵には大きな河川はなく，農業用水の確保に苦労してきた。江戸末期から農業用のため池を作り，明治初期には全部で12の共有のため池を所有するに至った。そのうち11のため池が現在でも使われており，個人で所有・管理してきたため池が他に7か所ほどある。

集落は，上地山（標高255m），天笠山（標高235m）などからなる標高200～250mの山地に囲まれている。2008年の石川県森林簿によると，金蔵の山林面積（注3）は約140haで，そのうちの約8割を占める約110haは民有林であり，それ以外は，社寺林（約11ha）や共有林（約18ha）である。環境省植生図「柳田」（2001年作成）をみると，現在の集落を取り巻く山林は，スギ，アテの植林地とユキグニミツバツツジーコナラ群落と主体とする広葉樹二次林を中心とし，尾根筋にはアカマツ群落がわずかに残っている。主な共有林の場所は，集落の東側，町野町徳成との境と，集落の南西，保生池周辺西山町との境の2か所である。集落東側の共有林約10haは，昭和40（1965）年頃に

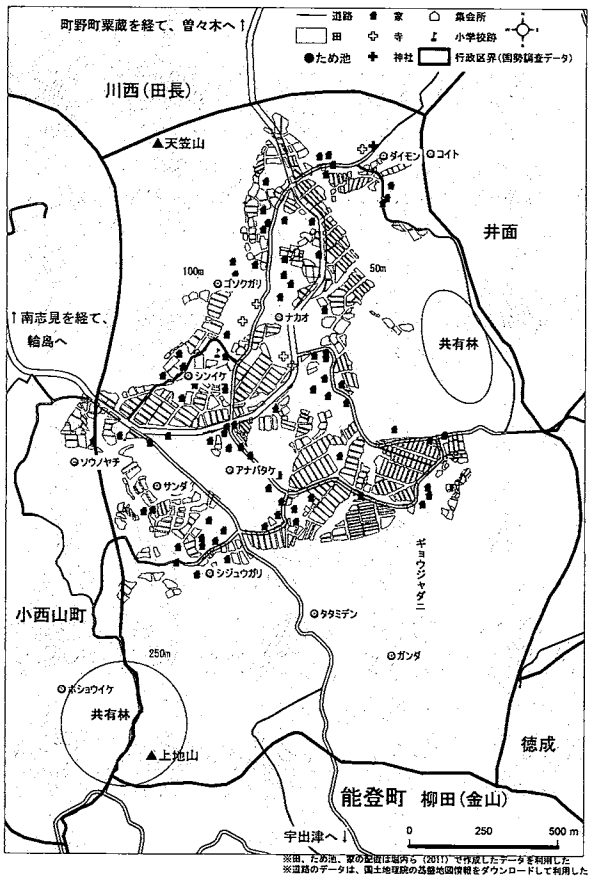

図1　金蔵の家屋・棚田・ため池・集落施設の空間配置.

Fig. 1　Map showing the locations of houses, paddy fields, pounds and village facilities in Kanakura village.

輪島市による和牛増殖基地設立のために開墾され，牧草地となった[注4]。肉牛の輸入制限撤廃などにより2年ほどで中止に追い込まれたが，この場所は，いまでも伐採跡地群落や落葉広葉低木群落となっている。

金蔵の地域社会は，本家―新宅（分家），親戚といった血縁によるつながりと，ジゲと呼ばれる地縁によるつながり，地主―小作を起源とされる社会階層によるクミというつながりといった複数の社会関係が織りなされながら維持されてきた。ジゲは，日常的な交際や冠婚葬祭に際して相互扶助を行う地縁による組織であり，10戸前後から構成されたものが9つ存在する。ジゲは，さらに3つずつで区（1集落，2集落，3集落と呼ぶ[注5]）を構成し，各区は20～30戸ほどからなる。自治的な活動をする行政の末端組織としては，3区をあわせた全体が，「金蔵」として機能している[注6]。地主―小作の関係から成立したといわれるクミは11あり，農地解放までは，むら寄合いで座敷にあがれるのはこのクミの頭（クミオヤ）のみであった[注7]。小作関係が崩れた現在では，祭礼にクミ単位でキリコを出すという機能が残され，キリコグミとも呼ばれる。

2）昭和40年代前後の里山利用の変化とその背景

金蔵は，能登町宇出津，輪島の市街地，珠洲市飯田から，それぞれ約20kmの位置にあり，この三者を結ぶ県道が交わる交通の要所であった[注8]。明治初期には，七尾県町野郷第十区の区会所がおかれ，明治7（1874）年には周辺で最も早く金蔵小学校が創設

図2　金蔵と周辺地域との位置関係.

Fig. 2　Location of Kanakura village and surrounding area.

され，郵便局もおかれていた[注9]。町野町は昭和31（1956）年に輪島へ併合され，昭和40年代に入り，輪島地区から町野町の曽々木を経て能登町宇出津へ至る県道が整備されたが，金蔵を経由しなかったので，金蔵はその直接の恩恵を得られず，交通の要所から離れた「僻地化」が進んだ[注10]。昭和30年代後半から昭和40年代にかけては，金蔵の人口は急速に減少し，過疎化・高齢化が生じた転換期であった。この時期の最大の変化は，従来の基幹産業であった農業の地位低下であった[注11]。2種兼業化が急速に進み，昭和50（1975）年には専業，1種兼業農家をあわせても，全世帯の約1割を占めるにすぎなくなった。農家の2種兼業化と農業の地位低下が進んだこの時期に，農家では，土建業の臨時雇い労働や農閑期の出稼ぎ労働などによる農外収入が著しく増加した[注12]。

農業の地位低下が進む一方で，農外収入が増加したことで，個々の農家では，様々な農業機械や農業用車両の導入が進み，昭和40年代以降集落全体としては，農道の整備，田んぼの基盤整備，大規模な用水池と導水路の造成工事などが大規模に行われた[注13]。もともと金蔵は，輪島市白米の千枚田のように小さく地形にそって曲がった形状の田んぼが連なる棚田地帯であった。昭和48（1973）年から昭和53（1978）年にかけて，田んぼの耕地整理が行われると同時に，昭和48（1973）年から昭和54（1979）年にかけて，当時使用されていた12の共有のため池を全て改善し，水の供給をよくしていった。修理費用は，ため池の水を使用するか否かにかかわらず区民全員で総負担することで賄われた[注14]。こうして，区画整理は，昭和55（1980）年に完了し，田んぼと農道，水路が近代化された。それにともない，昭和55（1980）年頃からどこでも動力田植え機・トラクターが使用されるようになり，農業のやり方が大きく変わった[注15]。

住宅の建て替えは，農外収入が増加した昭和40年代から盛んになり，茅葺き屋根から瓦屋根へ多くの家が変化した。昭和45（1970）年頃から囲炉裏がなくなったかわりに家電製品がそろい，エネルギー源は，薪炭から炊事はプロパンガス，家庭暖房は石油ストーブへ切り替わった[注16]。これは，山の利用がなくなったことを意味し，それ以前の屋根材としてのカヤ（ススキ）の刈り取りや，雑木林やスギ林の薪炭利用がなくなった。

大きな河川がない金蔵では，飲み水は井戸水に頼っていたが，雨量に左右され水に苦労した。昭和52（1977）年に輪島市の上水道が整備され，飲み水の不安もなくなった[注17]。昭和50年代には冷蔵庫が入りだし，肉類，魚介類も豊富になり，食べ物は西洋食に近づいた。昭和50年代には，高等教育機関への進学率も向上し，ほぼ全員が高校へ進学するようになった[注18]。

このように，金蔵では，昭和40年代を境に，それまでの農業のスタイル，食や住環境といった生活のスタイルが，大きく変貌した。それにより，金蔵において世代間で継承されてきた暮らし方や自然資源の利用の知恵や技術は，次世代に継承されなくなった。この変化の起きる直前の昭和42（1967）年と平成18（2006）年の空中写真を比較すると，昭和42（1967）年の山林では，広葉樹を中心として樹齢の異なる様々なタイプの林や，畑，牧場など様々な土地利用の様相がみられたが，平成18（2006）年になると針葉樹を主体として同じような樹齢の林が一様に広がる景観へと変化している。棚田は，農道などのインフラが整備され，田んぼ1枚の形も四角く大きくなるとともに，利用されなくなった山林との境界が明瞭化している。暮らしの変化が，自然と人間の関係を映し出す風景にも大きな変化を与えたことが読み取れよう（図3）。

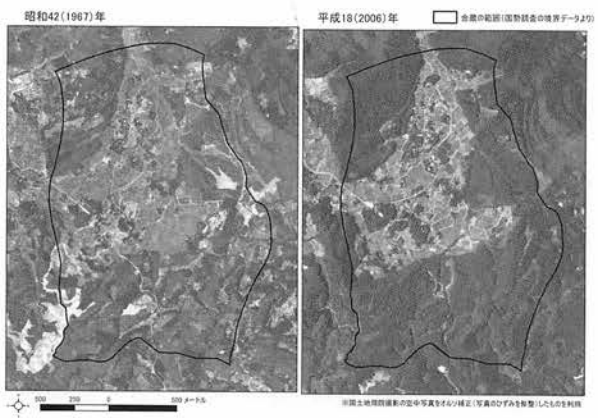

図3　1967～2006年の金蔵の集落景観の変化.

Fig. 3　Map showing the changes in landscape around Kanakura village from 1967 to 2006.

Ⅲ．聞き取り調査の概要

本章では，昭和初期～昭和40年代（1920年代後半～1970年代前半）を主な対象年代とし，その時代の里山および棚田の利用について聞き取った内容をまとめた。この年代は，金蔵の生活基盤である棚田の耕地整理以前であり，農作業の多くが人力に頼っていたかわりに，自然資源の利用の知恵・技術が世代間で継承されていた。以下の聞き書きは，平成23（2011）年11月～平成24（2012）年6月にかけて，昭和初期～昭和40年代に金蔵で幼少期から青壮年期を過ごした12名（男性4名，女性8名）を対象として行った。聞き取りは，1回2時間程度，燃料や生活資材，食料の多くを集落内の自然資源に頼っていた頃の暮らしや思い出を自由に述べてもらった。基本的に，1人ずつ話を聞いたが，仲の良い2，3人一緒に話を聞くこともあった。なお，自然資源の利用法や暮らし方，考え方，思いには個人や家による差があるので，まとめることはせず，対象者ごとに箇条書きにした。箇条書きの最後のカッコ内には，話者の属性（表1

表1　聞き取り対象者の一覧.

Table 1　List of object people of interview.

	生年	性別	出生地	備考
A氏	大正11年(1922)	女性	能登町小木	昭和17(1942)年に金蔵に嫁入り
B氏	大正11年(1922)	女性	輪島市南志見	昭和14(1939)年に金蔵に嫁入り
C氏	大正11年(1922)	男性	金蔵	定年(昭和50年代半ば)まで教員
D氏	大正14年(1925)	女性	金蔵	昭和21(1946)年頃に嫁入り
E氏	昭和2年(1927)	男性	金蔵	
F氏	昭和3年(1928)	女性	能登町宇出津	結婚後、昭和20(1945)年に金蔵へ疎開
G氏	昭和3年(1928)	女性	金蔵	
H氏	昭和4年(1929)	女性	金蔵	昭和25(1950)年頃に婿取り
I氏	昭和4年(1929)	男性	金蔵	
J氏	昭和6年(1931)	女性	金蔵	昭和25(1950)年頃に嫁入り
K氏	昭和8年(1933)	男性	金蔵	
L氏	昭和14年(1939)	女性	金蔵	昭和33(1958)年頃に嫁入り

の話者記号）を示した。文中の主な金蔵の地名や近隣の集落名は図1に記した。

1）子どもの頃の手伝い

・田植えの時は，学校から帰ってきてから田んぼに入って，周りを植えて歩いた。田植えの仕事をしたのは，小学校5年生くらいになってから。もっと小さい小学1，2年生の時は，祖母が学校から帰ってくるのを待っていて，畑に連れていかれて畑を踏んで歩いた。苗代を作る時期には，カエルをねらってカラスが入らないように，手を叩いて苗代の番もした。（D氏）

・畑でムギを作っていたので，春の中打ちで遊び遊び打って歩いた。田んぼの仕事は，着物が汚れるし，田んぼにはまるので親は田んぼへ入らせなかった。昔の田んぼは深くて，子どもではちょっとできなかった。だいぶ大きくなってから，畦の草むしりのお手伝いをした。（L氏）

・学校から帰ってきたら，タキモン拾いをした。自分の山はほとんどなかったので，周りのスギ林とかの枯れ枝を拾うぐらいだった。ギョウジャダニの上のあたりに拾いにいった。その頃はそんなものを拾っても誰も文句を言わなかった。山のそうじになるので，拾えばよけいいいくらいだった。（K氏）

・国民学校初等科4年（10歳位）くらいから，ハザかけ[注19]の手伝いをした。学校から帰ってきたら，刈ったイネを担いで運んだ。稲刈りは，子どもは鎌で手をけがすると危ないし，イネの束を刈ったイネでくくるのも硬くて子どもには難しいので，イネを刈る手伝いはしなかった。ハザは10数段あった。稲刈りを夕方までして，夜暗くなってから角灯で明かりをとってハザかけをした。（K氏）

2）田んぼ仕事

2－1）田んぼ中心の生活

・夫とは分かれ分かれの生活だった。夫はずっと出稼ぎで，春と秋だけ戻ってきた。私は春と秋，田んぼ仕事で家をほとんど留守にしていた。田んぼは，1町を超える面積を作っていたので，草を刈ったり，むしったりして，守をしていた。今度は冬になると，子どもを親に預けて，10月から4月まで家政婦の出稼ぎで東京に行った。（H氏）

図4　耕地整理前の棚田の風景（1973年4月，井池光信撮影）.

Fig. 4　View of terraced paddy fields before farmland consolidation.

・コメは3反から4反ほど作った。4反作る人は面積が多いほうだった。全部，手でやっていたし，小さい段々の田んぼだった。昔は，どんな大きな田んぼでも，1枚の面積は1反もなかった。（J氏）

・田んぼを5反，6反以上作っていたら，コメも値がよかったし，生活できた。そのかわりに手間がかかった。田打ち[注20]，鍬で田切り[注21]，あらくり[注22]と最低でも三回，田んぼに入らないといけなかった。その次は，下駄みたいな道具「オアシ」で，打ちかえした田んぼを歩いて株を踏み沈めた。その次に，長い板「エブリ」を押して場ならしをしてから田植えをした。田んぼへ入る回数は今に比べると大変なものだった。（E氏）

・よその田んぼ仕事にいってお金をもらうことを「ヒョウにいく」といった。地主の家はヒョウを頼んでやっていた。嫁がヒョウにいってもらったお金は全部姑に渡した。（J氏）

・地主の田んぼを借りて作ると，ゴシノウといって地主に収穫したコメを納めた。ゴシノウの量は，1反にどれだけと，田んぼごとの収量に合わせて決めた。終戦までは，コメを作っている家でもゴシノウで地主に持っていかないといけないので，食べるものは少なかった。頼んでまで小作をさせてもらっていた時代は，昭和30年代終わりくらいまでだった。（J氏）

2－2）田植え前の作業

2－2，1）土づくり，苗代づくり

・牛を飼っていれば，ウマヤゴエ（肥やし）になった。ウマヤゴエは田打ち前の田んぼに入れた。たいてい秋の暮れにやっておいた。トイレの下肥もみんな貯めておいて，それを桶に担いで，田んぼ

に撒いて歩いた。春になってから下肥をやる時は，あんまり早くやると流れ出てしまうので，今日明日打つ(田んぼを打ち始める)という日の前にやった。野菜でもなんでも余ったものは「もったいない，田んぼにほかせ（捨てろ）」とすぐ田んぼの中にいれた。(J氏)

・田んぼの最初の仕事は，ニカ（籾殻）を焼くことだった。田んぼの中に苗代を起こして，黒く炭のように焼いたニカを敷き，太陽の熱を集めやすいようにした。その上にイネの種をまいて，田植え用の苗を用意した。苗代を起こしたのは4月だったと思う。あんまり早くに種をまくと，霜が降りて

表2　昭和初期～昭和40年代頃（1920年代後半～1970年代前半）の金蔵の農事暦.
Table 2　Farming calendar in Kanakura village from mid-1920s to mid-1970s.

	行事	田んぼ仕事	畑・山仕事
3月末	雪が消える		ムギ（前年の10月末に種播き）
4月	ショク（3日の節句）	苗代づくり（苗代を起こす―水をはる―種をまく） 田に厩肥・下肥を入れる	
5月		田植えの準備 田打ち 畦叩き→田んぼに水を入れる 畦塗り 田切り（起こした土の塊を砕く） あらくり（代かき）…家により牛を使用 オアシ（去年の株を踏み沈める） エブリ（田んぼの表面をならす） 田植え	
6月	ノヤスミ(20日頃，田植え休み)		ダイズ アズキ 夏野菜
7月		草取り　1番取り（田植えから10日後） 2番取り	
8月	お盆（13～16日）	3番取り	
9月	秋祭り(17-18日)	稲刈り	ダイコン ハクサイ
10月	ホシバ祭り(28日)	ハザかけ（約2週間） いねこき（脱穀） 刈り上げ(28日)　うすすり（籾擦り）	
11月	ニワ祭り	田に厩肥・下肥を入れる	タキモン担ぎ
12月	アエノコト(5日) 初雪		藁仕事 (～3月)
1月	正月		
2月	アエノコト(7-9日)		

※1）聞き取りを元に筆者作成
※2）「ニワ祭り」は，昭和10（1935）年頃には行われなくなった。なお，「ニワ祭り」とは，籾擦りが終了したら地主の家で行われた行事。「ホシバ祭り」は，稲刈りが終わったらおはぎを作ってお祝いする各家の行事で，現在でもおはぎを作る風習は残っている。

苗の先が赤くなってしまった。(J氏)

・2，3軒の近所の仲間で畑(はた)苗代(なわしろ)といって，畑にイネの苗を作ったこともある。田んぼの中の苗代を作るほうが多かったが，畑苗代も在所の中でけっこうやられていた。(B氏)

2－2，2）田起こし～代かき

・田起こしは，ショク（旧暦3月3日の節供）が済んだ，4月終わり頃から始め，6月10日頃までに大方田植えを終えた。(A氏)

・耕地整理する前は田んぼが小さくて，段々になっていた。水が漏って，すぐなくなってしまうような田んぼだった。最初にした作業は稲株を鍬で打つ，田打ち。その後に田切りといって起こした土の塊を3つにも4つにもつぶした。田打ちと田切りの間には，田かきといって，田んぼを起こしたのを一回牛にかかした。田かきをする時は雨が降るとなおいい。金蔵は水が足りないので，雨が降ると田んぼに早く水がまわって土がやわらかくなった。田切りの後にあらくりをした。(J氏)

・田かきでは，牛がおれば牛を使ったが，牛を使わない人もいた。乾いた田んぼは水持ちが悪いので，水持ちをよくするために畦端だけでも牛で田かきをした。牛には鋤をひっぱらせて，牛の鼻をとって牛のかじ取りをした。牛をうまくまわらせられなかったら，「鼻とりが悪い」と怒られた。牛は鼻をひっぱられると痛いが，なかなか思うようにまわってくれなかった。(J氏)

・田切りをしてから，畦端の土を細かくして，鍬でトロトロにした土を畦際に置いていって(畦寄せ)，その土を畦に塗りつけた（畦塗り)。畦寄せをする前には，田んぼが乾いている時に，大きなカケヤで田んぼの畦端を叩いて（くるがち)，今度は畦の根元を叩いて（畦叩き)，水が漏れないようにしておいた。水は，田んぼを打って畦を作ってからいれた。昔は小さい田ばっかりなので，管理が悪かったら，ヘビやモクロ（モグラ）が穴あけたりして水が出て行ってしまう。そうしたら今度，「水を使う」とイケシタ[注23]の人に怒られた。田んぼに水を入れるタイミングは土地によるし，ほかの人も使うので，どこにでも勝手に水を入れられなかった。(J氏)

・あらくりは鍬でしたり，牛でもおれば牛にしてもらった。牛にひかせた道具はマンガ（馬鍬）といった。やわらかい田んぼで水持ちのいい田んぼなら，「切りあらくり」といって，1回起こした土の塊を，いっぺんに細かくして，田切りとあらくりを1回で済ましてしまう場合もあった。あらくりの次は，大きな下駄みたいな，カンジキの田んぼ版みたいなオアシを履いて，田んぼに浮いている去年の稲株を踏み込んだ。オアシを踏む，といった。オアシを踏んだら，すぐに，柄がついた6尺（約1.8m）ほどあるエブリで田んぼをならした。その翌日に，田植えをした。(J氏)

・子どもの頃のあらくりは，牛でやっていた。湿田でははまってしまうので，牛は使わなかった。牛で耕作していたのは耕運機が入ってくる昭和46（1971）年頃までだった。牛は自分の家でだいたい1頭飼っていた。子牛を買って，肥育して売ることが主だった。メス牛が多かった。(K氏)

・夫が亡くなった後，田んぼの畦塗りをしていたら，近所のおじじ[注24]が見ていて，こうやるんだと教えてくれた。ただ泥をつければいいものだと思っていたが，コツを教えてもらった。(B氏)

・耕地整理をして，畦を塗る必要はなくなった。(H氏)

2－3）田植え

2－3，1）エー（結）[注25]による田植え

・田植えは5月の終わりから6月の中頃までだった。6月20日頃に遅い田植えをしていたこともある。苗取りは朝4時頃からした。寒くて，火を焚いて手をあぶったり，酒粕を飲んでお腹を温めたりして苗取りをした。(B氏)

・朝飯前から，苗代から苗取りをして，苗を藁で束ねて田んぼに持っていって植えた。その時分は，整地していない小さい田んぼだったから，後ろずりに植えて，みんな5人も6人もエーをして，ヨモト（4株）ほどを1人で植えていった。四角い田んぼじゃないから，田んぼなりにずっと植えていった。ワク（田植え枠）は若いころから使っていた。小さい田んぼは，見当で植えたり，3尺（約90cm）ほどの小さいワクを使って植えたりした。植えるのが早い人に挟まれて，自分が遅いと，年よりから「こら，あねま[注26]何しとるか，はよいかんか。長桶担ぐがや（長桶を担いでいるみたいに遅い

ぞ)」と怒られた。(J氏)

・隣近所の女性たちが田植えの手伝いにきた。自分の家では，隣近所から3，4人頼んだが，大きい家では7，8人も頼んでいた。朝ごはんだけは田植えに来てもらう家の人が準備した。ご飯にきなこをつけて朴葉につつんだ「朴葉飯」がよく出された。お昼ごはんは，自分の家に戻って食べた。(A氏)

・田打ち，田切り，あらくり，田植え，草取り，みんな6，7人でエーしてやった。(B氏)

・エーは，たいていそのジゲごとにした。クミはまた別の組織だった。祭りだとイノイケグミ，シバノグミ，フジタグミなどがあり，お寺のお講でも，金蔵寺だと，ナガミネグミやフジタグミ，ドバシグミなどのクミがあった。祭りのクミとお講のクミはまた違った。クミでエーをすることはなかった（ジゲとクミについては，前述「Ⅱ-1）調査地」を参照)。(G氏，J氏)

2－3，2）田植えにまつわる風習

・一服することをコビリ(注27)といった。おはぎやおにぎり，ふかしたジャガイモなどがふるまわれた。作るのは年寄り衆（年配の女性たち）の仕事だった。田んぼは家の近くにあることが多かったので，コビリの時は，よく家のエギ（縁側）で食べた。(J氏)

・田植えの時には，年寄り衆はよく歌をうたっていた。「田植え唄」や「草取り唄」，「あらくり唄」というのもあった。「かっちゃり，かっちゃり」と相の手を入れた。歌う人はたいてい決まっていて，労働がたいそうになってきたら歌い出した。今はもう歌える人はいない。(G氏，J氏，H氏)

・田植えが済めば，おはぎをして，仏様に供えて食べた。(A氏)

・田植えが終わったらノヤスミがあって，なんでも作ったりした。田植えの後も水あて(注28)をしたり，畑をしたり，休む暇がなかった。(L氏)

2－4）水の利用・管理

2－4，1）水あて

・昔の水あては大変だった。今みたいに用水がうつくしく（きちんとして）なかったので，うらぼり（裏側に漏れてしまうこと）してしまうせいだった。(G氏)

・ナガミネジの田んぼの水は全部，ガンダの池から高の用水を伝わせて田んぼに引いている。昔は，田んぼと田んぼの間が急な崖や谷になっているような田んぼもあって，水あても苦労した。水あての時は，用水の水が漏れていないか見ないといけないので，昔は上の用水を伝って，ガンダの池までいったが，今はその用水も壊れてしまった。ガンダの池の下にも，昔は田んぼがあった。(K氏)

・昔は田んぼから田んぼに水を流すこともあった(注29)。あてこし（田越し灌漑）と言った。あてこしの水の管理は，個人個人でやっていた。他人の田んぼからあてこしをするようなことはなかった。自分の田んぼのどこか1か所に用水から水をひいて，自分の田んぼの範囲であてこしをやっていた。あてこしの田んぼでは，代かきをするときには，上からすると田んぼの土が流れ出てしまうので，下の田んぼから先にしていった。(K氏)

2－4，2）飲み水

・田んぼで仕事をするときは，飲み水は持って歩かなかった。デミズ（湧水）の出るところにちょっと穴を掘っておいて，そこにいっては水を飲んだ。集落のところどころ，特に田んぼのしたぐり（棚田の傾斜の下あたり）にデミズがでるところがあったので，それを飲んだ。昔は，デミズのでるところは，それは大事にした。(J氏)

2－5）草取り

・草取りは，一番取り，二番取り，三番取りといって，3回する人もいたし，田んぼごとの草の生え具合によって草取りの回数も変わってきた。一番取りは，田植えから10日過ぎで，「肥(こえ)まわし」と昔の人はいった。草が生えるか生えていないかわからないうちに，土の肥しをまわす意味があった。イネの根の張り具合がよくなった。2番取りは，小さい草を除いた。雑草は，オモダコ（オモダカ科オモダカ）やコゲ（カヤツリグサ科マツバイ）などがあった。コゲは，青く短い草で，じゅうたんがひいたようになってたいへんだった。ヒエはイネより先に伸びてしまうので，ヒエがある田んぼだとイネを刈る前に，「わけどり」といって，ヒエだけ鎌で刈り取った。他の雑草は，イネより長くならない。中干しは，昔もある程度はやったけど，

あんまり中干しをすると，乾きすぎて今度は水の管理がたいへんだった。一枚の田んぼでも浅いところと深いところがあった。したぐりのほうが深かった。(J氏)

２－６）稲刈り

２－６，１）秋祭りが済んだら稲刈り

・稲刈りは，日吉神社の祭り(注30)が終わってからだった。早稲は「のうりん一号」，晩稲は「ぎんぼうず」という品種(注31)だった。刈ったイネを夕方までに担いでハザへ持っていけないときは，「ニョウする」といって，4把ずつ交互に置いて，2束分のイネをひとかたまりにして田んぼの畦に積んでおいた。そうしたら雨が降っても株がぬれなかった。(J氏)

・稲刈りは，10月までかかった。刈り終わっても，田んぼに積んであるニョウを担がないといけなかった。セナガチ（背負子）を着て，ニョウひとつ（2束分）か，3束(注32)くらいは担いだ。エーをすると，あの人は3束担ぐのに，私は２束だけというわけにはいかないから，みんな同じくらいの量を担いだ。(J氏)

２－６，２）ハザかけ（天日干し）

・稲刈りの時は，日暮れまでイネを刈って，ハザにかけるのはよさり（夜）の仕事だった。稲刈りはエーを頼むこともあったが，ハザにかけるのは家の人だけの仕事だった。(B氏)

・イネは全部手で刈って，ハザにかけた。子どもも学校から帰ってきたらイネを運ぶ手伝いをした。ハザは9～11段にして，自分の家の周りにたてた。稲刈りの日は，朝食前から稲刈りに出かけて，遠い田んぼからもセナガチでイネを担いで家まで運んできた。女性は3束，男性だと5束を担いだ。(A氏)

・ハザにかけたイネは，1週間では乾かなかった。乾くまでの時間は，雨にぬれたり，晴れあがったり，天候によって2，3日違った。たいてい，家の近くにハザがあって，ハザから降ろしたイネは，12把を１束にして縛って，家のニワに積み上げておいた。(J氏)

２－６，３）脱穀・籾擦り

・子どもの頃のいねこき（脱穀）は，足踏みの機械でやった。親が１人でいねこきをやるのはたいへんなので，いつもいねこきを踏む手伝いをさせられた。種籾をとるのには，籾が痛まないように千歯こきを使っていたと思う。(J氏)

・いねこきは，自分の家でした。うすすり（籾擦り）は，機械を持っている人に頼んで，籾を擦ってもらった。10月28日が「刈り上げ」で，在所中の人が大方稲刈りを終える日だった。(A氏)

３）動植物の利用

３－１）田んぼ周辺

・昔は川にカニやゴチ（ヨシノボリ類などハゼ科の淡水魚）がいた。今はゴチも見ない。泳いでいるゴチをつるつるっと飲んだことがある。(J氏)

・田んぼのドジョウも食べた。捕まえて，子どもにあげたら喜んだ。今はいない。(G氏)

・田打ち前の田んぼには，タニシがいた。ガット（カエル）は苗代に入って卵を産んだ。(B氏)

・草取り時分の6月頃にはユウラミ（カヤツリグサ科クログワイ）といって田んぼの中に生える植物を採って食べた。ひげが出ていて，その根元を探すと白い根が付いていて，下に黒豆みたいなものがついていた。田んぼの水で洗って食べたらおいしかった。子どもの頃，親が田んぼから拾ってきたものを帯にはさんでおいて，子どものおやつに採ってきてくれた。昔はお菓子がないから，よく食べた。(G氏，J氏)

３－２）牛（注３３）

３－２，１）牛の草刈り

・家に牛がいたから草を刈らないといけなかった。牛のえさの草は，田んぼの周りから採ったり，人の田んぼの草をもらったりした。山へも行って刈った。遠いところの山へはいかなかった。刈った草は担いで運んだ。背中から荷物がはなれなかった。(B氏)

・小さい頃は，家に牛がいたので，親たちは飯前に露のある間に草を刈ってきては，納屋にたくさん置いていった。近所の人もみんなそうしていた。牛はたくさんいても4頭ほどだった。子牛が太ったら市(注34)へ出して，ちょっとお金にでもなっていたのか，みんな牛を飼っていた。みんな「市にいっ

てくる」と，毎年，子牛を出していた。牛の草を刈りに行く場所は，自分のところの地面の草だった。自分の家の畑の周りや田んぼの周り，なければカヤヤマ（茅葺きの材料のカヤを育てて採取する山）の山までいって，順々に草刈りをしていった。祖父と祖母がよく二人で刈りに行って，朝飯前なので「ひとね」ずつ刈っては持って帰ってきた。中学生になったら，その間に自分でご飯を炊いて，梅干しと一緒にお弁当につめて学校に行った。（L氏）

・1人で担がれる草の量を「ひとね」といった。藁を，固結びに結んで，ひものようにしたものをニソといって，そのニソでひとかたまりの草をしばって，セナガチで担いできた。（J氏）

3－2，2）牛のエサ

・牛に食べさせるスリワリ[注35]をゾーゾと言った。沸騰しているお湯へ，ジャガイモでもなんでも細かく切って入れて，そこにダイズをすって入れた。牛に食べさせるダイズは欠けたもので，いいダイズは人間が食べた（J氏）。

3－2，3）牛飼い

・子どもの頃は，祖父は牛を飼ってその世話して，家族を食べさせてくれた。食べることで苦労はしなかった。牛は，子どもを産ませるのに，1頭飼っていた。1頭子牛が生まれれば，3万円になった。昔の3万円は，今の30万円より大きい額だった。子牛は，走って歩くようになってから，市場へ出した。牛を飼っていたのは自分が婿をとった昭和25（1950）年頃までだった。（H氏）

3－3）馬車引き[注36]

・父親は馬車引きで，家には馬がいた。父親は，自分が中学生になるかならないかの時（昭和10（1935）年頃）に亡くなるまで，馬車引きで商売をしていた。宇出津や輪島へよく通っては，金蔵で買ったコメを積んで売ったり，宇出津からは肥しを買って積んできたり，と自分で仕入れから販売までしていた。西山など他の在所からも父親が仕入れた商品を買いに来ていた。当時，馬車引きをしていたのは金蔵で父親1人だった。馬は1頭だけで，いい馬だった。馬車引きは一年中，毎日やっていた。冬は，ワラジを作って馬に履かせて，ソリを引かせていた。馬のえさは，母親が作った。馬も働くので，草だけ食わせておくわけにはいかず，栄養のあるマメやムギを大きな5升鍋に入れて，毎日必ず囲炉裏で炊いていた。藁を細かく切って，こんか（糠漬け）と混ぜたものも食べさせた。自分は藁切り役をさせられて，オシギリで藁を細かく切る手伝いをした。たまに人の田んぼを頼まれて，馬にマンガを引かせて，田んぼの土をドロドロにして水持ちをよくする田かきもさせていた。金蔵で馬をもっていたのは，自分が物心ついた時は，うち1軒だけだった。（I氏）

3—4）植物素材から作った道具

3－4，1）藁細工

・藁からカマスを編んだり，ムシロを打ったりした。冬の夜の仕事だった。カマスを編む機械は，4尺（約1.2m）もある機械で，腰掛けるところがあり，足踏みだった。（D氏）

・藁は，ヨコヅチで叩いた。足に踏んで，カチン，カチン，と藁を叩いてくれるカチンコも使った。カチンコは誰の家にもあるわけではなく，ない人は近所の家のカチンコを使った。たいてい，ニワ（土間）の隅っこに置いてあった。（G氏，J氏）

・雪の日は藁で作ったフカグツやオソ[注37]を履いた。オソは，積雪の少ない時に履いた。靴下もないので，フカグツやオソの中にはスベ（稲藁のはかま）を入れて，素足をその中に入れて使った。（G氏，J氏）

・スベを藁の根元からとることを，「藁すぐる」といった。舅の時代の50～60年前までは，スベを揉んで柔らかくしてお尻をふいていた。トイレに「スベ入り」といってスベが入っているかごがあった。フキの葉っぱやダンズリ（タデ科イタドリ）の葉っぱもお尻をふくのに使った[注38]。ダンズリは折ってきて，皮をむいて，食べるとすっぱくておいしかった。（J氏）

・クミカケは，必要な時にその場で，藁の束（2，3把）を足に合わせて大きく編んだもので，雪のすごい時に履いた。クミカケで雪の中を歩くと楽だった。雪がたくさん積もると「クミカケ履いて，跡（道）をつけてこなけりゃだめだわ」と言って，まずクミカケを履いて雪の上を歩いて，道をつ

くった。(J氏)

・ワラジは春になると外に出るときに必要だった。仕事によってはワラジが痛むので，冬の間に何十足と作ってぶらさげておいた。冬仕事で近所の女友達と一緒によく作った。輪島に行くにも宇出津に行くにもワラジを履いていった。ゴムの履物はあっても買えなかった。子どもはゾウリなのでワラジは履かなかった。中学校に通うのもゾウリだった。(G氏，J氏)

・藁仕事は，昔はみんな親から習ってやっていた。ワラジや縄は，冬の間につくらないといけなかった。ワラジは，冬の間に3，40足も作った。フカグツやワラジをこしらえるのは，ほとんど女の人だった。男の人は，荷を担ぐ縄を作ったり，正月のしめ縄を作ったり，田んぼで使う前垂れを作ったりした。みんな昔は，手で縄をなっていたが，そのうち縄をなう機械がはやった。セナガチも，キリの軽い木に縄を巻いて作った。みんな冬の仕事で，それぞれ家で作った。子どもの時は，学校から帰ってきたら，カチンコを使って藁叩きの手伝いをさせられた。でも，自分の時代になると，だんだん必要がなくなって，自分はそんなに藁仕事はしなかった。(I氏)

3－4，2）田植枠

・ワクが入ったのを初めて見たのは，兵隊から帰ってきて田んぼの手伝いをした時だった。昭和20（1945）年に兵隊から戻ったので，ワクを使い出したのは昭和17，18（1942，1943）年頃ではないか。ワクは，大工さんがこしらえたが，ちょっと知恵のあるものなら自分でこしらえた。ワクの幅は家によって違うが，縦は5寸（約15cm）や6寸（約18cm），横はたいてい1尺（約30cm）にした。(E氏)

3－4，3）カンジキとウサギ狩り

・カンジキも作った。カンジキの木は，曲がっても折れない，ジシャの木とかいう木（クスノキ科アブラチャン）だった。木に縄を巻いて，カンジキを履いて，若い時にはウサギ狩りによくいった。木に罠をかけておいて，次の朝にかかっているか見にいった。ウサギを2，3羽とったことがある。(I氏)

3－4，4）現金収入

・冬になると金蔵から宇出津まで，野菜やコメやマメなどを担いでいって，帰りに魚を買ってきて，その魚を金蔵で売っていた人が何人かいた。田んぼ時分は忙しいが，冬になればみんな仕事がないので，藁仕事で作った荷縄でもみんな宇出津まで持っていって売った。金蔵からよく持っていったのはコメで，これが一番売れた。(L氏)

4）畑仕事

・畑で作っていたものは，ゴマ，ソバ，アズキ，ダイコン，ジャガイモ，サツマイモ，サトイモなどだった。ソバの実から作ったソバは臼で挽いて，団子にしてソバガキにして食べた。キビは穂を刈ってきて，庭に石の臼があったので，それでついて，きびもちにした。粉米を砕いて，ご飯の上に乗せて，コメの足しにして食べた時代もあった。(A氏)

・雪が消えるのは3月末。4月の1カ月間は畑をしていた。ムギつくりをした。ムギの間を「中打ち」といって耕した。ムギが収穫されるのは6月頃で，田植えが済んでから刈った。ちょうどコメがなくなってくるころだった。そんなに量は作っていなかったので，収穫したムギを売ることはなかった。オオムギは鍋に炒って，臼で挽いて，出てきた粉をふるいでふるってイリコにした。それをご飯にかけて食べたり，暑い時は冷たい水で柔らかくして箸で食べた。コムギは，挽いて粉にしてスイトンにしたり，炒ってしょうゆを作ったりした。(D氏)

・畑では，ムギを植えたり，ムギの間にアズキを植えたりした。収穫したムギは，ムギこきでおとして，農協[注39]へ出した。ジャガイモも農協へ出したことがある。背中に担いで出荷した。畑は主に下肥だった。田んぼには下肥はやらなかった。小学校の便所の肥やしも使わせてもらったことがある。(B氏)

5）山仕事

5－1）焚き物づくり

・年の暮れになるとタキモン担ぎもした。山のある人は自分の山からとってきたが，山のない家では，他人の山にいって，スギの木の枯れ枝を，竹に鎌

図5 集落周辺の里山林の風景（1973年4月，井池光信撮影）.

Fig. 5 View of secondary forests around the village.

を付けたものを作って，それで枯れ枝をひっぱると，カチンと折れてくる。それを担いできた。アテの木は，なかなか枯れ枝はなかった。(J氏)

・タキモンは山から採ってきた。木を伐った時の枝をもらって，山の中の焚きもん棚に積んでおいて，秋に「タキモン担ぎ」といって隣の人とエーしてでも遠いところからでも担いだ。遠いところだと，在所の山（保生池周辺の共有林）の近くまでいった。保生池の近くに自分の山があったので，そこによく行った。秋になったら冬に焚くために持ってきて，納屋にみんな積んでおいて，それを囲炉裏に持ってきては使った。山から持ってきた時のタキモンは，結構長くても，家に持って来てからトントンとのこぎりで切っては使った。切られないものは，囲炉裏から飛び出ていても，そのうち燃えてくれば折れるので，長いまま囲炉裏にくべた。(L氏)

・タキモンは，山のそうじの時に枝打ちなどで伐り下ろした枝を積んでおいて，冬になる前に家まで持ってきて，納屋に入れたりして保管しておいた。囲炉裏では，タキモンをくべて，鉤に吊る下げた鍋で汁ものを作ったり，魚を焼いたりした。炭は贅沢だったので使わなかった。(A氏)

5－2）コバギ作り

・バギは，タキモンとおんなじ燃料用だけど，家で使うタキモンよりも太い木を長さ何十センチかに伐って，それをオキ（オノ）で割ったものだった。1尺5寸（約45cm）くらいにそろえたものをコバギといって，「コバギ担ぎ」といっては出した。売り物だった。コバギにした木は，たいていクリなどの雑木だった。(J氏)

・舅は，自分が嫁に来た頃は，まだ年金がもらえなかったので，コバギみたいなものを作って，それを瓦屋さんに買ってもらっていた。どんぐりのなるホソ（コナラ）の木を伐って出してお金にしていた。コバキは保生池のあたりから西山の県道まで担いで出した。女の人を頼んでは，よく担いで出していた。「誰か瓦屋のところへやるげん」と，「珠洲に行くげん」とか聞いたことある。当時はそんなものしかお金になるものがなかった。(L氏)

5－3）ヤマグリ拾い

・子どもの頃は，どの山にもクリがたくさんあった。朝早く山へ行ってはヤマグリを拾った。雑木を伐ってみんな植林してしまったから，今ではそんなことはしなくなってしまった。ヤマグリはゆでて食べたり，塩漬けしてから干して炒ったものを糸につないで食べたりした。(L氏)

・若い時に，カンヤマのほうに栗拾いにいって道に迷ったことがある。あっちにもこっちにも栗の木がはぜているので，栗を拾うのに一生懸命になって，方向音痴になってしまった。栗は重たいし，いっぱいたまってくるし，大変だった。(G氏，J氏)

5－4）炭焼き

・炭焼きを10年以上した。兵隊から戻ってきても仕事がないので，炭焼きを始めた。田んぼの合間に一年中やっていた。炭焼きをやったのは，上地山にあるヒロミという金蔵の共有の雑木山だった。保生池の高にあった。今は植林してしまって，雑木林もなくなってしまった。炭焼きの時期は，皮（樹皮）がむける前[注40]が一番いいが，夏の皮のむける時期でも上手に焼けば，皮がうまくついて実入りのいい炭ができた。どんな時期でも下手な焼き方をしたら皮がパカンパカンと全部落ちてしまうので，実入りが悪くなった。焼いた炭は，俵に詰めて，4キロずつにした。あの時分は，炭の検査があって，久田（きゅうでん）（柳田）の人が炭の検査員で等級を決めてくれた。(E氏)

5－5）木挽きと丸太担ぎ(注41)

・昔は，金蔵でも荷担ぎで木を出した人がたくさんいた。5，6人でマコして（グループを組んで）は山から木をセナガチで背負って出した。ガンド(横引きの抜刀用の大型のこぎり）で木を伐り出す木挽きもしたことがある。近所の木挽きのおじじの弟子になって，3，4人くらいでマコして，鈴屋から南志見から柳田，どこもアオキを伐るのに歩いた。朝から晩までやったら，一日でけっこうな本数を切れた。木挽きの季節は決まってなかった。「あそこのアオキ伐ってくれ」と依頼がきたら行った。田んぼが忙しくてもいったことある。伐り倒すには木のどこを切ったらいいか，みんな親方から教えられた。昔はヨキで受け口をあけて，クサビを使って倒した。木をはつって，家の材料にするところまでが木挽きの仕事だった。それを使って大工さんが家を建てた。(I氏)

6）オヤッサマによる山林管理

金蔵の民有林の多くは，オヤッサマと呼ばれる10軒ほどの地主が所有していた。オヤッサマの1人のC氏（1922年生まれ，男性）に山林の管理について聞いた。C氏は，定年まで教員をしており，近郷の中学校の教頭や小学校の校長も勤めた。以下は，C氏の聞き書きである。

・所有している山の面積は実測で10町（約10ha）ある(注42)。

・昔は，燃料にする薪（まき）は，自分の山から採ってきた。燃料のために雑木をやしなっていた。同じところの雑木を，あるいは燃料にしたり，あるいは炭に焼いたりということをした。近いほうの山の雑木は薪（まき）にして，冬の燃料にしたり，ご飯を炊いたりした。

・炭に焼くのは，職人が来て，ひとやま，木だけを買って，炭小屋を建ててしていた。炭を焼いて15年から20年たつと自然に雑木がまた生えてきた。それをまた誰かが焼くという，そういう炭の商売の人がいた。農家が副業で焼いた。冬におおかた焼いていた。炭を焼く職人は，金蔵にいたし，川西の田長や徳成といった隣部落からも泊りがけで焼きに来た。

・雑木でないところにはアオキも植わっていた。住宅を建てるとすれば，アオキ（スギやヒノキ，アテの針葉樹の総称）のスギやアテを伐って使っていた。

・今から30～40年前の昭和50（1975）年頃に，雑木は経済的にあわなくなったので，山の雑木を全部，アオキにかえた。

・枝打ち，間引き（間伐）といったアオキの手入れは，教員をしていたこともあり，人を頼んで行っていた。アオキに切り替えるときは，雑木のところにアオキを植えて，シタナギ（下刈り）をした。それでアオキを育てた。雑木が邪魔になるので，毎年シタナギをした。アオキの手入れで出てくる枝のうち雑木は使うが，アオキはそのまま下に敷き詰める形で腐らせて，肥やしにした。

・アテは必ずスギの下へ植えた。アテは良い枝を伐って，挿し木で植えることができた。スギを売っても，次はアテが売れる，ということだった。

・ヒノキは，病気があるのでダメだという話だったので，他の家ではあんまり植えていない。でも，植えてみたら，育つし，なんともなかった。

・赤土のところには，マツ林があった。マツは松くい虫が出て，枯れるので，スギとヒノキにかえたが，なかなか成長が遅い。マツ林があった頃は，マツタケが出た。

・昔は，カヤだけが生えているカヤヤマがあった。面積は，1反もないくらいだった。秋の終わり頃になると，毎年カヤを刈って，束にしたもので家を囲う垣（雪囲い）に使った。雪囲いに使うことは，カヤの乾燥も兼ねていた。春になると雪囲いを取って，カヤを作業場に積んでおいた。昔は，クズヤ（カヤで葺いた屋根）だったので，15年か20年くらいためておいて，屋根の葺きかえに使った。屋根は，いっぺんに葺きかえることはせず，前のほう，後ろのほう，と片面ずつ葺き替えた。

・雪囲いをトタンでするようになったのは，カヤが採れなくなったからではなく，瓦屋根になって，葺き替えする必要もなくなったし，カヤがいらなくなったためだった。終戦後，カヤを葺かなくなったせいで，カヤを刈らなくなった。カヤヤマには，スギやヒノキを植えて，今はアオキの山になっている。

Ⅳ．おわりに

本稿では，農業の作業，食や住環境といった生活スタイルが大きく変貌を遂げた昭和40年代以前の，金蔵における棚田と里山の利用に関する聞き取りをまとめた。

12名（男性4名，女性8名）の聞き取りを通して，昭和40年代以前の金蔵の暮らしに共通する空間的な構造として，家屋を中心に，畑，田んぼ，牛の飼料となる田畑周りの草地，屋根材採取のためのカヤヤマ，スギやアテの人工林（建材以外にも自家用の燃料採取も兼ねる），炭焼き・自家用タキモン・商品用コバギ採取のための雑木山（クリなどの食料採取も兼ねる）が広がる構造がみえてきた。そして，それぞれの場所から採取した資源を，食料，燃料，道具として利用していた。生活に必要な資源の獲得，利用は，集落のなかで完結するのではなく，近隣とのネットワークに支えられていた。例えば炭やコバギ，藁細工など現金を獲得するための商品に加工され，宇出津や町野などに売られていき，逆に金蔵では手に入らない魚介類や塩などが入ってきた。

人力に頼っていた昭和40年代以前の里山の利用や暮らしは，地域社会内に存在する複数の重層するコミュニティに支えられていた。棚田での稲作では，家族を基本単位としながらも，親戚や近所の相互扶助である「ジゲ」による相互扶助のシステムがみられた。藁細工など道具を作る技術は，親から子へと家族を通して伝わっていた。里山利用についても，例えばコビキなどの職人は，親方を中心としたグループ「マコ」がみられた。このような血縁，地縁，職縁などのコミュニティを通じて，棚田や里山を利用する技術・知恵が共有され，継承されていた。

すべてが人力であった田んぼ仕事や畑仕事は，大変だった。しかしその一方で苦労だけではなく，楽しみもあったという話も，本調査の中でもたくさん出てきた。たとえば，正願寺で夏のお参りの夜に催された踊りや，氏神の秋祭りの後に集落の人たちで披露した芝居は，本当に楽しかったという。特に女性たちにとって，田植えは朝早くから晩まで大変な労働であったが，朝食や2回の休憩（マエビリとコビリ）では，普段は口にできない朴葉飯やおはぎがふるまわれ，田植え唄を歌いながら5，6人のエーの仲間でにぎやかに行う田植えは，一種のイベントのような楽しみであった。このように，若い時にエーをして共に田んぼ仕事をした仲間は，高齢になってもお互いに家を行き来し，何かあれば助け合う仲間になっている。そして，それが「金蔵は住みやすい」「金蔵に生まれて金蔵にいられるのは幸せ」という言葉につながっていた。

能登半島の他地域，例えば七尾市熊木川流域においても，里山と人との関わりあいが大きく変化し，スギ植林地の放棄と耕作放棄地の拡大という現在まで続く土地利用の問題は，昭和40（1965）年前後を起点としている（堀内ら，2011）。昭和40年代が，能登半島の里山と人との関係において，地域を超えた共通の転換期であったことが浮かび上がってくる。能登半島の他地域の調査をさらに進めることにより，里山と人の関わりあいの変化が各地域でどのように起こり，どのような問題を生じ，それに対してどのように対処してきたのか。地域差をふまえながら整理していくことが今後の課題である。

謝　辞：本稿の調査を行うにあたり，輪島市町野町金蔵の皆さまには多大なご協力をいただいた。聞き取り調査に快く応対してくださった皆さま，多くの情報を提供くださった井池光夫氏に深く感謝します。また，聞き取り調査は，井池光信氏，見供めぐみ氏（以上，金蔵在住），栗田英治主任研究員（農業・食品産業技術総合研究機構）とともに行った。特に，見供めぐみ氏には，さまざまな調整をしていただいた。この場を借りて御礼申し上げたい。

注

(1)「石川県輪島市金蔵地区における自然景観と伝統を活かした集落活性化」として，SATOYAMAイニシアティブの実践例のひとつとして紹介された（プレック研究所・国連大学高等研究所編，2010，p.18）。

(2) 全国的にも，昭和35～50（1960～1975）年の間に農家人口が減少し，都市集中・出稼ぎが増えたが，町野町も例外ではなく，父親は，兼業で出稼ぎをするようになり，主婦が農業の柱となった（町野小学校創立百周年記念実行委員会編，1976, p.382）。

(3) 郷土の歴史に詳しい井池光夫氏（元輪島市文化財保護審議会委員）によると，金蔵の山林面積はもともと100haといわれており，そのうち半分の約50haが共有林，約

50haが民有林だった。共有林の面積は，昭和に入って金蔵以外の個人に売却されるなどして少なくなっている（井池, 2010, p.106）。

(4) 井池（2010），p.109。

(5) 金蔵が3区に分割された経緯は，戦時中にさかのぼる。戦時中に戦時体制が叫ばれる中，農村各地で農事実行組合が設立されたことを受け，金蔵においても，行政からの連絡事項や配給物資の配分を行う金蔵農事実行組合が結成された。その際，地域が広いので，2～3のジゲをひとまとまりにして，第1～第3農事実行組合を作った。この3つの農事実行組合の区域が，戦後もそのまま行政の末端組織として機能する部落区分となり，昭和50（1975）年頃以降に，第1～第3集落という呼び名が定着した（井池，2010, p.107-108）。

(6) 鹿野（1996），p.45。

(7) 香月（2001），p.48-49。

(8) 町野小学校創立百周年記念実行委員会編（1976），p.20。

(9) 香月（2001），p.44-48。

(10) 金沢大学文学部文化人類学研究室（1989），p.2。

(11) 鹿野（1996），p.52。

(12) 鹿野（1996），p.53。

(13) 鹿野（1996），p.53。

(14) 龍谷大学社会学部社会学科（1994），p.21。

(15) 井池（2010），p.120。

(16) 井池（2010），p.119-120。

(17) 龍谷大学社会学部社会学科（1994），p.21。

(18) 鹿野（1996），p.53。

(19) 刈ったイネの束を，「ハザ」と呼ばれる丸太などで組んだ稲架に掛けて，天日干しさせること。

(20) 田んぼをほりおこし，土壌に空気をいれるのを目的とした（龍谷大学社会学部社会学科，1994, p.25）。

(21) 田打ちによって起こされた土の大きい塊を細かく砕く作業のこと（龍谷大学社会学部社会学科，1994, p.25）。

(22) 代かきのことで，土と水とをかきならす作業のこと（龍谷大学社会学部社会学科，1994, p.25）。

(23) 同じため池を利用する受益者のことを「池下（イケシタもしくはイケジタ）」という。各ため池には1人ずつ管理者がおり「池係（イケガカリ）」と呼ばれる。

(24) 隠居した祖父のこと。住民同士が呼びあうときには，家による社会的地位によって，「どこどこ（屋号）のおじじ」などと呼ばれることが普通だった。農地解放以前の地主―小作関係があった時代は，地主（おじじさま），自作農家（おじじ），小作農家（じいじ）など家柄によって呼び名が違ったが，農地解放後は，家柄による区別は厳格ではなくなった。

(25) 田植などの時に互いに力を貸し合うこと（「広辞苑第六版」より）。

(26) 若い嫁のこと。農地解放以前は，地主（おあねさま），自作農家（あねさま），小作農家（あねま）といった家柄による呼び分けがされていた。

(27) 田植えのときの3時の休憩のことをコビリ，10時の休憩のことをマエビリと言った。

(28) ため池の受益者は，池係の許可を得た時間帯に，ため池の栓を抜いて自分の田んぼに水を入れる。これを金蔵では「水あて」と呼ぶ。

(29) 昭和50年代の耕地整理以後は，用水路から田んぼ一枚に直接水が配給されるようになった。

(30) 9月17日が宵祭りで，18日が本祭りであった。井池光夫氏によると，戦後，早場米奨励金が交付されるようになり，金蔵でもそれに合わせてコメの収穫期を早め，祭日が収穫期と重なるようになったため，昭和25（1950）年頃に祭日が8月20日に変更された。

(31) 昭和12（1937）年頃，金蔵ではヒゲボウズという品種のコメを生産していた。昭和15（1940）年頃に銀坊主が生産され，昭和20年代になると早場米奨励金の交付によって早生化が進み，早生品種の占める割合が多くなり，農林一号，ホウネンワセ（昭和30年代），越路早生（昭和40年代）など早稲品種が生産されるようになった。昭和57（1982）年頃からコシヒカリが導入され，昭和62（1987）年頃から作られるようになった，能登ひかりとあわせて，現在の金蔵で生産される品種のほとんどを占めるようになった。（龍谷大学社会学部社会学科，1994, pp.23-24）

(32) 4把を1束とした。3束（12把）は50キロくらいの重さになった。

(33) 昭和27～28（1952～1953）年頃に歩行耕運機が導入される前は，主として耕作用に牛が使用されていた。各農家が，平均1.5頭ほどの牛を保有していたという。金蔵全体の農家の約70%が，牛を1頭保有しており，多い農家では2頭を保有していた。牛を保有していても田んぼが狭すぎたり，深田だったりしたために，牛が入れない田んぼが農地全体の約半分であった。耕運機の導入にともなって，昭和28（1953）年頃から牛は減少し始めた。次に金蔵では昭和45（1970）年頃に乳牛を飼育しようと試みる農家が現れたが，定着しなかった（龍谷大学社会学部社会学科，1994, p.22）という。また，牛のことを

金蔵では，バッコと呼んでいた。宇出津や輪島では，ウシと呼んでいたので，そこから嫁に来た人は何のことか分からなかったという話をいくつか聞いた。

(34) 井池光夫氏によると，牛のせり市は，昭和15（1940）年頃までは町野町の白山宮（町野町粟蔵）の場所で行われた。その後，一時期柳田のせり市に出していたが，輪島市三井町洲衛に大きな牛のせり市がたつようになり，金蔵からも洲衛のせり市に出した。

(35)「スリワリ（スリワリ汁）」とは，能登の伝わる郷土料理のひとつで，エダマメやダイズをすり鉢ですり，だし汁を加えて作るみそ汁のこと。具材にはキノコや豆腐を使うことが多い。

(36) 井池光夫氏によると，馬車引きが行われていたのは明治終り頃から戦後にトラックが登場するまでの時期であり，金蔵で，馬車引きをした家は，4軒ほどあった。馬車引きの登場する以前は，人が荷物を担いで宇出津まで運んでいた。

(37) 奥能登の山間では，「オソ」と呼ばれる藁で作られた，爪先保温の機能のもった雪中履物が使用された（石川県立郷土資料館編，1981，pp.23-24）。

(38) 当時大切な肥料であった，下肥にスベや葉っぱを入れて，下肥を増やす意味もあった。

(39) 金蔵で生産されたコメなどの穀物は，戦前までは，馬車引きや荷車によって宇出津の問屋まで運ばれ，買い取りが行われていた。戦時中になると，コメやムギなどの主要食糧の価格や供給等を政府が管理する「食糧管理制度」が創設され，昭和18（1943）年に農作物の一元集荷を担う戦時統制団体の「農業会」が全国的に組織された。町野町でも農業会が組織され，金蔵で生産したコメは政府に供出された。戦後になっても食糧難のために，引き続き食糧管理制度のもとに政府による主要食糧の統制・管理が行われ，その体制のもとで昭和23（1948）年に農業会を改組する形で農業協同組合（農協）が発足した。町野町でも昭和23（1948）年頃に町野町農業協同組合が設立し，金蔵で生産された穀物やイモ類などの集荷や共同販売，肥料の共同購入が町野町農協によってされるようになった。

(40) 秋から冬にかけては，木が生長を止めており，木に含まれている水分が少なく樹皮もはがれにくい時期とされる。一方，春から夏は，木が水を吸い上げて生長しているため，樹皮がはがれやすくなっている。少しの衝撃で簡単に樹皮がはがれて傷つきやすい春から夏は，一般に木の伐採に適さないとされている（鈴木ら，2010，p.63）。

(41) 井池光夫氏によると，木材の伐採・搬出には複数の職人が関わって成り立っていた。まず，「木商人（きあきんど）」が地主に交渉して立木を購入し，「木挽き」の親方に伐採を依頼した。「木挽き」が伐り倒した木は，「丸太担ぎ」が背中に担いで，山から馬車やトラックが通る道まで運び出した。金蔵周辺の木材のほとんどは陸路で能登町宇出津まで運ばれ，そこからは船で運ばれたという。また，「木商人」も「木挽き」も親方がおり，親方のもとに職人のグループが組まれていた。金蔵には，「木商人」「木挽き」「丸太担ぎ」の親方や職人がそろっていたという。

(42) 井池光夫氏によると，金蔵では，木の値段がいい時代には，1年に10aの山林を売れば1年間生活できるだけの収入になり，50～60周期で材木は育つので，登記簿上で3ha（実測面積で5～6ha）の山林を持っていれば一生暮らしていけたという。山の管理も小作など山を持たず，山の資源が生活のために必要な人たちによってすべて行われる仕組みになっており，例えば，薪を燃料に欲しい人が雑木の伐採から地拵えまでを行い，スギ苗を植えてから数年間の下刈りは牛の草が欲しい人によって行われ，枝打ちは燃料にするために枝が欲しい人がやってくれ，材木として売れる頃になると木商人が買い付けをしてくれた。木商人は，毎年春先になるとが山を見て歩き，雪害により折れたり枯れたりした木があったら，山持ちに報告して買い取ってくれることもした。このように山持ちは1銭も金を出さなくても木が育ったという。

文　献

石川県立郷土資料館編，1981：わらの民具：石川県立郷土資料館夏季特別展図録．石川県立郷土資料館，58p.

井池光夫，2010：棚田のむら今昔―寺荘園村の歴史と現況―．石川県農村文化協会編，石川農の風土記　第4集，石川県農村文化協会，75-132.

香月洋一郎，2001：奥能登町野川下流域調査ノート．神奈川大学日本常民文化研究所奥能登調査研究会編，奥能登と時国家　調査報告編3，平凡社，東京，7-80.

金沢大学文学部文化人類学研究室，1989：町野町金蔵　文化人類学の視点から．金沢大学文学部文化人類学研究室実習報告書，88p.

金蔵小学校百周年記念事業実行委員会，1974：百周年記念誌，91p.

鹿野勝彦，1996：輪島市町野町金蔵―「僻地」農村集落の過疎化と住民の対応．過疎村落研究会編，集落の過疎化過程・現状と展望，社団法人農村環境整備センター，東京，45-60.

鈴木京子・赤堀楠雄・浜田久美子，2010：基礎から学ぶ　森と木と人の暮らし．社団法人農山漁村文化協会，東京，143p.

プレック研究所・国連大学高等研究所編，2010：暮らしと生物多様性―SATOYAMAイニシアティブの視点と実践例―．国連大学高等研究所・環境省，19p.

堀内美緒・中村浩二，2011：中山間地域農村におけるGISデータベース導入と地域主体による活用の意向―石川県輪島市町野町金蔵を事例として．農村計画学会誌，**30**，309-314.

堀内美緒・中村浩二，2012：聞き書き資料：能登半島熊木川最上流に位置する須久保の1960年代以前の里山利用．日本海域研究，**43**，123-132.

町野小学校創立百周年記念実行委員会編，1976：町野小学校百年誌．町野小学校創立百周年記念実行委員会，輪島，418p.

龍谷大学社会学部社会学科，1994：金蔵のエチュード　奥能登の社会と文化(1)．1993年度社会学調査実習Ⅰ（古賀班）報告書，163p.

輪島市立金蔵小学校編，1994：金蔵の昔がたり．輪島市立小学校，116p.